



中山 2 号 墳
中山 五 輪 塔 群

昭和 57 年 3 月

八雲村教育委員会

例 言

1. 本書は、八雲村教育委員会が鳥根県松江土木建築事務所からの依頼を受け、昭和56年度において実施した中山2号墳及び中山五輪塔群の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、八雲村教育委員会社会教育係主事補宮本徳昭が担当し、あわせ事務局も担当した。
3. 遺物整理・同実測・図面浄書は、宮本・房宗寿雄（鳥根大学学生）が行い、写真は宮本が行った。
4. 編集・執筆は宮本が担当した。
5. 現場作業に次の方々にお世話になった。
岸本公・為石重徳・岩田悟郎・和田松子・外谷幸子・為石令子・小早川美枝子・山崎恵子・三好澄江・石原美智子・山崎輝子
遺物整理を須山きよ子にお願いした。
6. 中山2号墳について県文化課卜部吉博主事、遺物について鳥根大学名誉教授山本清氏に多大なる御教示を賜り、記して感謝の意を表する次第である。

目 次

I 調査にいたる経緯とその背景	1
II 位置と環境	1
III 中山2号墳	5
(1) 五輪塔基壇	5
(2) 墳丘の調査	7
(3) 内部主体	10
(4) 遺物	12
(5) 五輪塔	14
IV 中山五輪塔群	15
V 結 語	19
VI 図 版	21

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 鉄刀子実測図	3
第3図 五輪塔分布図	5
第4図 基壇実測図	6
第5図 砥石実測図	6
第6図 墳丘実測図	8
第7図 墳丘下実測図	9
第8図 第一主体部実測図	10
第9図 第二主体部実測図	11
第10図 遺物実測図	12
第11図 五輪塔実測図	17

図 版 目 次

○ 発掘前全景 (南西より)	23
○ 〃 後 〃 (南西より)	23
○ 墳丘下遺構 (南西より)	24
○ 五輪塔基壇遠景 (南西より)	24
○ 〃 (南西より)	25
○ 遺物出土状況 (No. 2・No. 3) (南西より)	25
○ 主体部遠景 (南西より)	26
○ 〃 近景 (第一主体部下・第二主体部上) (南西より)	26
○ 第一主体部 (南西より)	27
○ 第二 〃 (南西より)	27
○ 墳丘南平坦面五輪塔分布状況 (北より)	28
○ 南側トレンチ (北より)	28
○ 中山2号墳出土遺物	29
○ 中山五輪塔群 (南東より)	30
○ 〃 (北東より)	30
○ 中山五輪塔 (一部)	31

I 調査にいたる経緯とその背景

昭和55年6月中旬、八雲村教育委員会は県道大東東出雲線改良工事の情報を得たため、分布調査^{註1}をもとに現場確認を実施した。その結果中山2号墳の墳丘大半が、工事予定範囲に含まれていた。早速八雲村建設課に報告と設計変更を要望し、この経過について昭和56年3月の八雲村文化財保護審議会に報告した。

昭和56年10月中旬、中山五輪塔群（当時石垣として使用）について、旧土地所有者より村教育委員会へ通報があり、現場確認の後、村建設課へ連絡をとった。これを受け村建設課・松江土木建築事務所と村教育委員会の三者立会いで、現場協議をした結果、「地形上設計変更は無理」との結論により、発掘調査を実施することとなった。

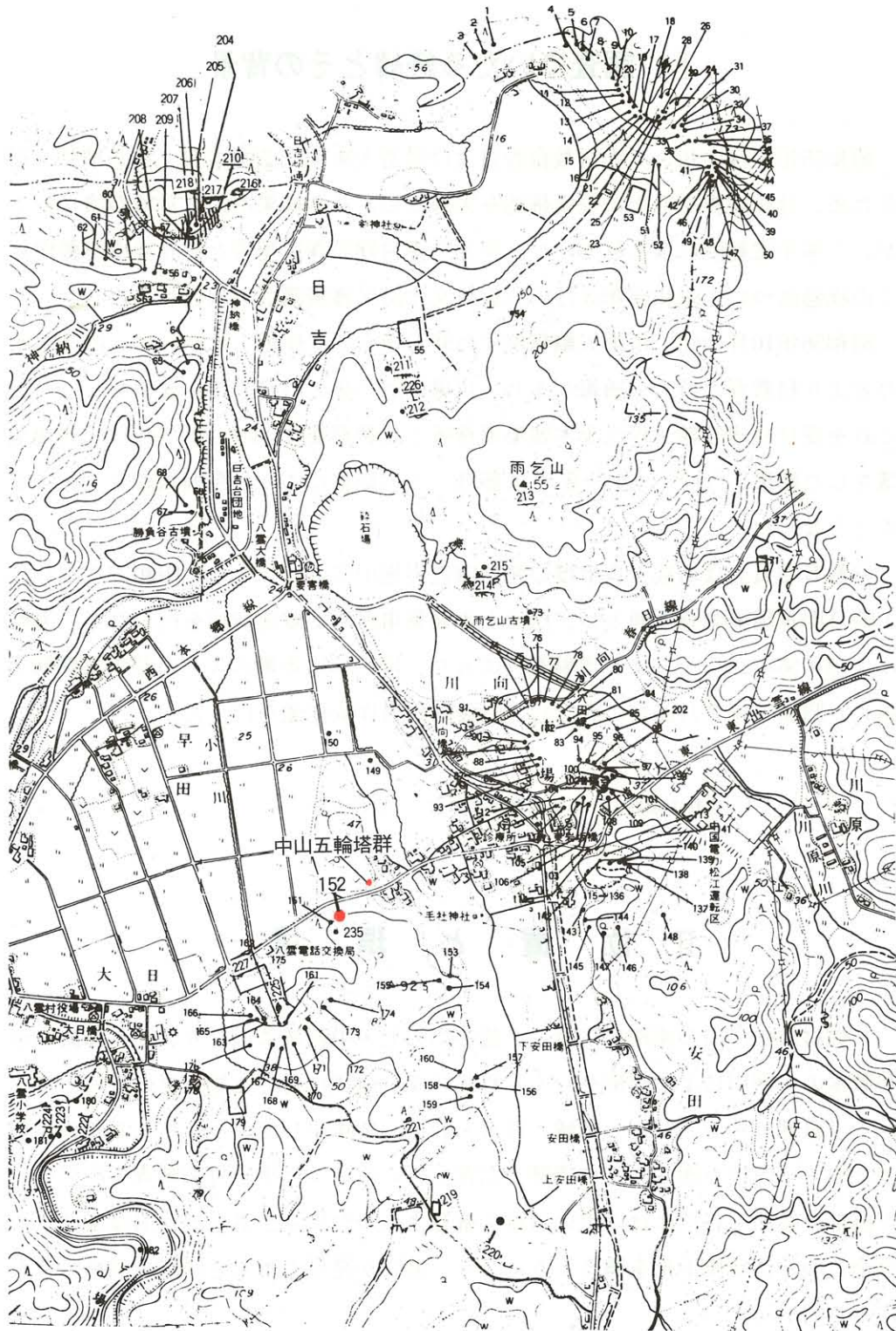
村教育委員会は増福寺古墳群の発掘調査実施中であったため、昭和57年1月の1箇月間を現場調査期間とし、松江土木建築事務所と委託契約を行ったが、実際には昭和56年12月20日より現場調査に入り、降雪等の影響により当初予定期間を越え、昭和57年2月25日に終了し、以後報告書作成作業を行った。

註1 『八雲村の遺跡』 八雲村教育委員会 1978年

II 位置と環境

八雲村は松江市の南部に位置し、意宇川の上・中流域にあたり、それに流れ込む数本の小河川により地形をつくられている。遺跡は村の北側（村の入口）に広がる平原部二つをとり囲む地域（日吉・岩坂）に集中している。そしてこの平野部に出る小河川を溯るように遺跡が点在しているが、近年の分布調査で小河川の上流部の高所・谷口には中世の遺跡が確認されつつある。また地形的な条件から、宅地造成が遺跡集中部を襲うようになり、遺跡が発見されると同時に消滅の状況にある。

このような中で、重要な考古学的発見がある。昭和55～56年にかけて村教育委



第1図 周辺の遺跡（「八雲村の遺跡」追加）

員会が発掘調査した小屋谷古墳群は、4世紀代の3基の方系墳であったが、箱式石棺・壺棺とともに、3号墳の組合式木棺内から四蛇鏡1面が出土している。また増福寺古墳群は12基の方墳が発掘調査され、5世紀後半から6世紀初めの間に築造されたようで、同一丘陵上にある土井13号墳の例とともに、この丘陵上にある50基前後の古墳はほぼ同一時期に築造された方墳群と考えられ、今後この時期の群集墳として、重要な意義が見出されるものであろう。^{註1}

今回発掘調査の対象となった中山2号墳と同五輪塔群は、八雲村第一の平野の南東部に南から突き出た水田比高15~20mの台地状の、それぞれ西と東の隅に位置している(第1図)。

この南の山は『雲陽誌』意宇郡東岩坂の条に「古城山 城主来歴しれず俚民此山を禪定寺といふ」と出ており、砦状に形成した山容となっている。この山の西半分には、禪定寺古墳群・同横穴群があり、各10基前後確認されている。その南の平坦面(現在畑)からは、鉄製刀子(第2図)が出土している。

中山古墳群は八雲村第一の平野を見下しており、3基の方墳が各三角形の頂点のように分布している。2号墳は1号墳を南西27mに見下し、3号墳に南南西33mから見下されている。3号墳は1号墳を、北西27.5mに見下している。

中山五輪塔群のある台地状の丘陵には、他に五輪塔・宝篋印塔等石造物片が点在しており、畑には須恵器・土師器片が散布している。

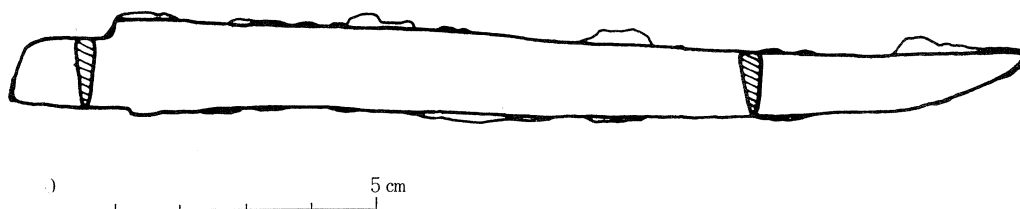
またこの県道大東東出雲線改良工事に伴い、才ノ峠サエの神^{註2}・中山サエの神^{註3}が各若干移転している。どちらも移転及び工事中に立会ったが、露出の河原石以外、何も検出されなかった。

註1 『増福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1981年

『 同 上 』 同上 1982年

2 『八雲村の祭祀習俗』「サエの神とサエの神の遷宮」 八雲村教育委員会 1981年

3 註2に同じ



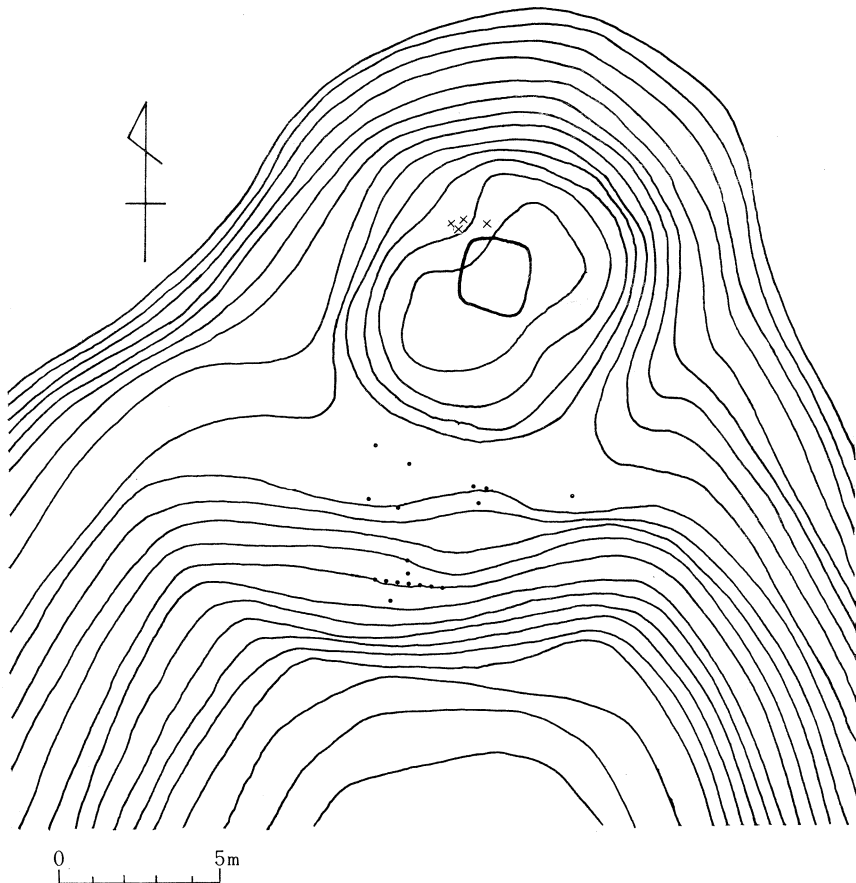
第2図 鉄製刀子実測図

Ⅲ 中 山 2 号 墳

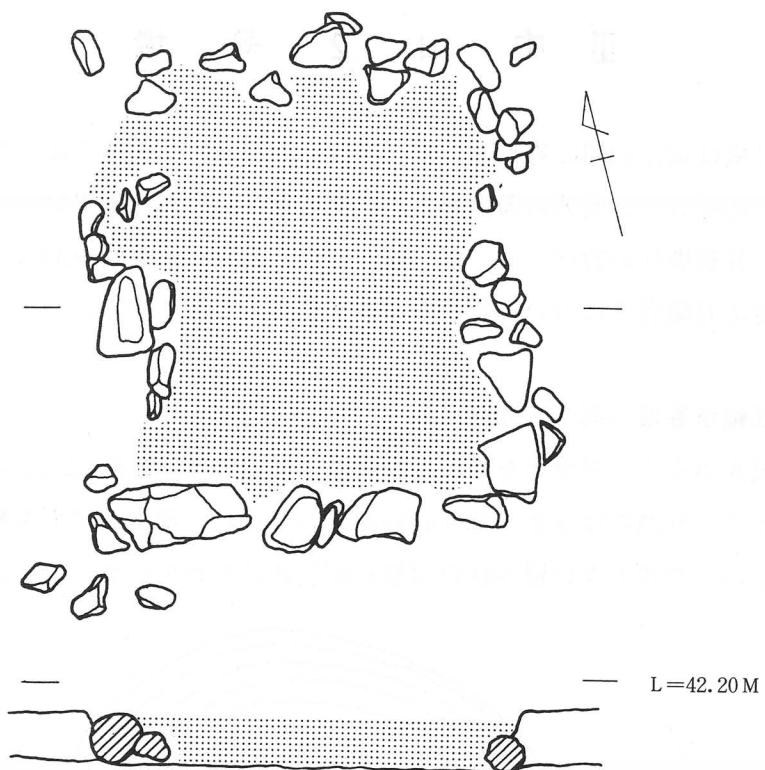
中山2号墳は現在信仰の対象として、墳丘の南斜面に「荒神さん」が祀られていた。その前提ないし前述の環境からか、墳頂部ないし墳丘南平坦面、山側斜面下平坦部に五輪塔片が散在していた。従って以下調査状況を順を追って記述しながら、最後に五輪塔片について若干の考察を加えることとする。

(1) 五輪塔基壇 (第3・4図)

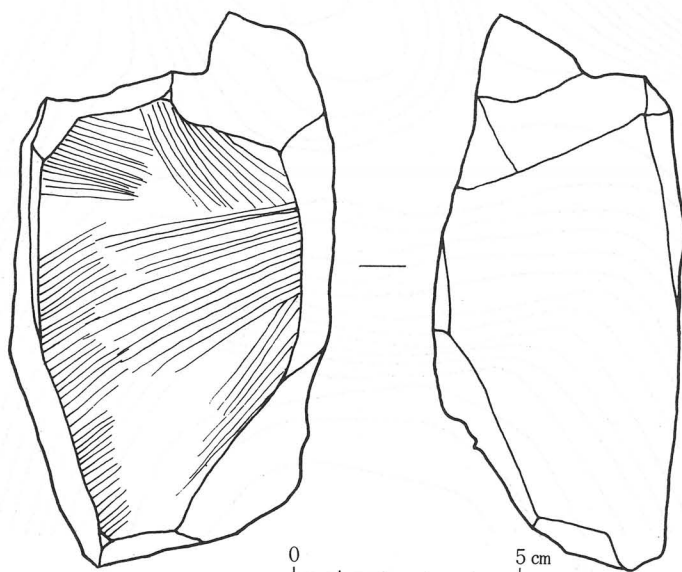
墳丘平坦面中央で、腐葉土を除去した段階に検出した。1.8×2.1mのほぼ南北に主軸をとり、外側には0.2～0.3mの河原石ないし一部山石で形を整え、その中に拳大ないしやや大きい扁平状の河原石が詰め込まれていた。高さは0.2m前



第3図 五輪塔分布図



第4图 基 塩 实 测 图



第5图 砥 石 实 测 图

後であり、構築時に墳丘表土を皿状に3.0m四方・深さ0.25m掘り込んでいるようである。河原石の中には、やや砥石状磨滅の痕跡があるもの数点検出されたが、明確なもの1点のみ図示した(第5図)

河原石包含層から遺物が検出されなかったため時期比定の資料はないが、墳頂部に石灰質製五輪塔風輪部や同塔片が検出されており、また墳丘南の山側平坦面に来待石製五輪塔各輪部が数基分あることなどから、五輪塔を建てるために造られた基壇と考えてほぼ誤りないだろう。類例として、松江市のかいつき山古墳の墳頂部にこれとほぼ同規模の遺構があり、ここでは宝篋印塔の相輪部が検出されている。^{註1}

註1 「松江市かいつき山古墳」、『島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅳ集』1972年

(2) 墳丘の調査(第6・7図)

本古墳は南から北へ伸びる台地状の西はずれに位置し、墳丘北・西斜面下は県道大東東出雲線が走っている。標高は墳頂部で42.0m、南の山側は明瞭なる加工急斜面があり、その下に平坦面が造られ、さらに周溝(平坦面)・墳丘南斜面となる。他三方斜面は自然急斜面となっている。

地形測量では、南北にやや長い方墳ということは明瞭であったが、墳丘平坦面の北西及び南東隅部が攪乱により、正確な範囲等はつかめなかった。

発掘の結果築造時の規模は、墳丘平坦面で南北7.5m・東西6.0m、墳裾では南北13.0m・東西9.5m、高さは南側1.3m・北側2.9m以上であり、北側平野部から見上げた場合を意識しているのか、高さ以上に墳裾辺長さ11.0mもあり台形状を呈していた。周溝は南側にのみ平坦面として、幅2.9mの規模を有し、南西隅で須恵器片が出土した。

封土は前述のように、墳頂部中央に深さ0.2m～0.3mの五輪塔基壇による墳丘表土の攪乱があるが、7～8層で1.0～0.3mの厚さをなしている。褐色土と黄色土系(地山ブロック多く含む)を版築状に盛り、特に黄色土はかなりしまっていた。そして北西隅—北側—南東隅の間、最下層と各黄色土系層を墳裾部にかなり厚く盛り土堤状にしていた。これは急斜面であるため、盛土作業時に盛土流出を防ぐためと、常に平坦面をつくるように考慮したためであろう。

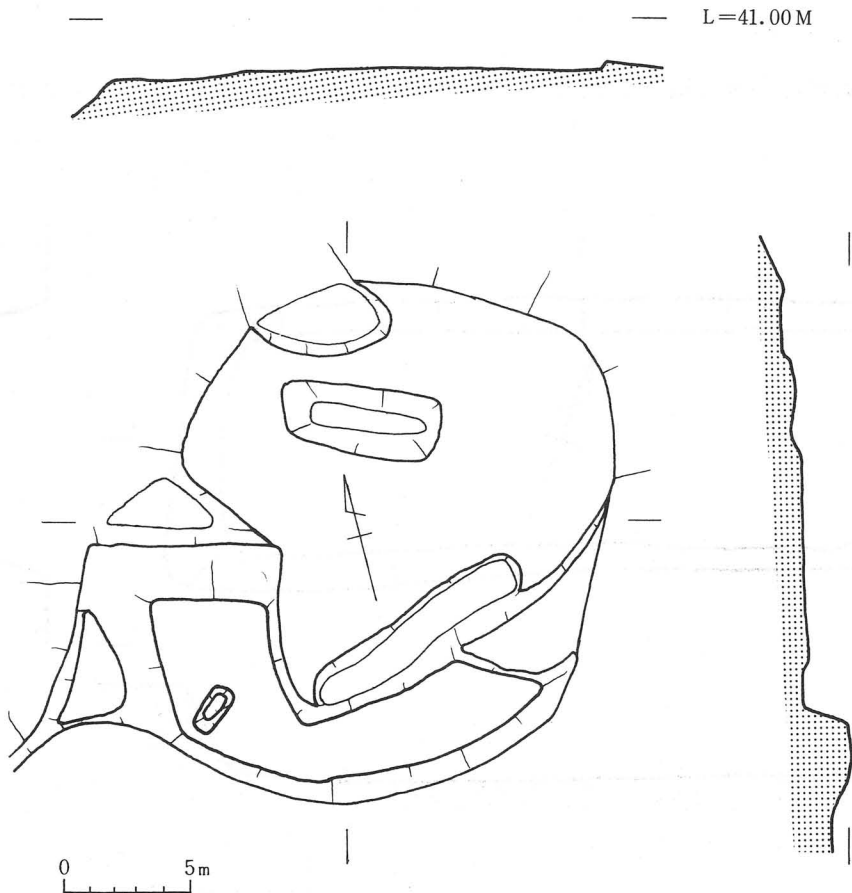
封土最下層は黒色土層で、多量に炭火物を含んでおり、中にはその組織の方向



第6図 墳丘実測図

まで明瞭なものもあり、盛土前にその場を焼いたかのように見えた。この黒色土層をさらに下げ進んだ結果、南の墳裾線から北へ1.5 m 地点で地山が1.0 m 若干法面をなしながら落ち込み、その北側墳丘下全域ほぼ平坦に、地山の変化したと考えられる砂質灰色土層が広がっていた。また東西関係では、墳裾西辺中央部から墳裾東西幅の1/4まで東西方向にあり、そこから南へほぼ直線をなしながら若干の法面をなし落ち込んでいる。東側は北側へ直線をなす点から墳裾東辺中央部へ向かって、ほぼ直線をなしながら垂直法面である。また地山面南西隅に1.0×0.5 mの長方形の落ち込みが浅いながらあり、南東隅も段差がある。北側の平坦面では、南側に浅い溝状のもの、中央に舟底状の落ち込みがある。

本古墳の南側は、裾平坦面南端から6.0 mの所に比高3.0 mの平坦面がある。この平坦面から北へ3.0 mの間は、落差2.0 mの急斜面になっており、それから



第7図 墳丘下実測図

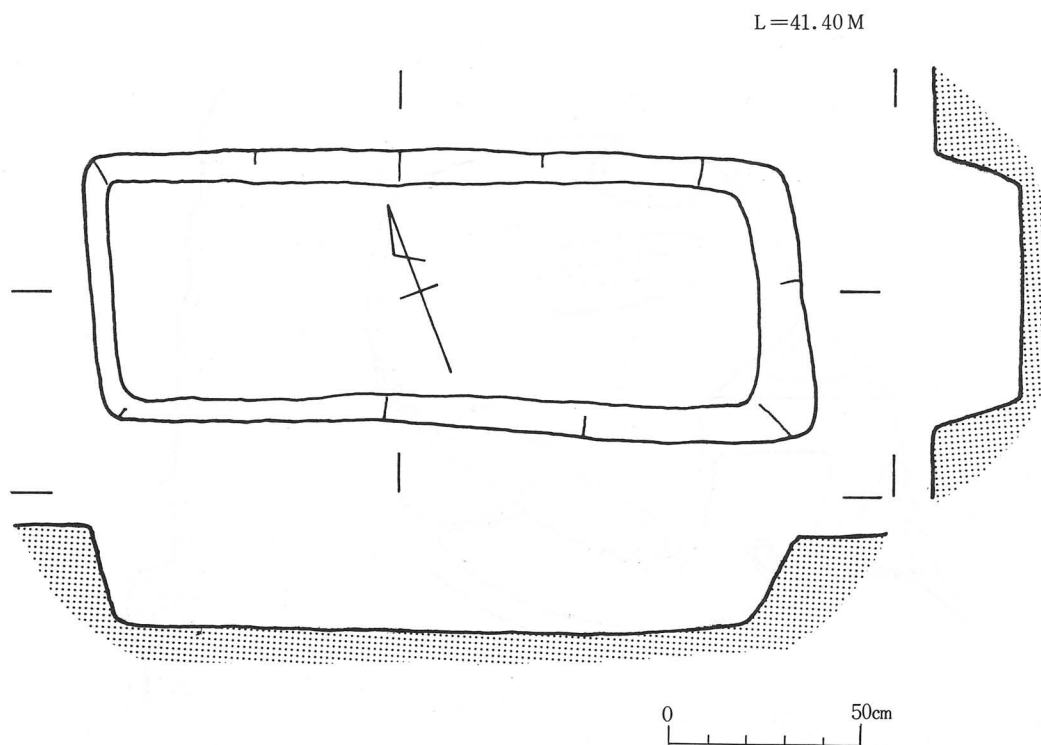
北へ2.44mの平坦面がある。さらに北へ1.0mの間、落差0.4mの斜面となり、裾南平坦面へとつながっている。丘陵上の平坦面は、自然地形としては不自然であり、また土層観察からも何らかの造成が行われていると考えられる。

(3) 内部主体 (第8・9図)

墳丘平坦面中央に第一主体部、それに平行して北東部に第二主体部が位置しており、第一主体部の主軸はN-68°-Wを、第二主体部の主軸はN-67°-Wを各々としており、主軸間距離で約1.68mのほぼ平行の位置関係にあった。

検出の端緒は五輪塔基壇を取除いた時、のちの第一主体部南隅のすぐ外側で須恵器蓋坏3セットが各倒置されており、のちの第二主体部北東側長辺ほぼ中央(鉄製刀子出土地点)のすぐ外側に須恵器小形壺1つがほぼ正立しており、第一主体部西隅外側で手づくね土器が1つ東へ口が向くように倒れていたことによるものである。

五輪塔基壇を完全に取除いた表土下0.40mで、長方形の黒色土部分が2本平行



第8図 第一主体部実測図

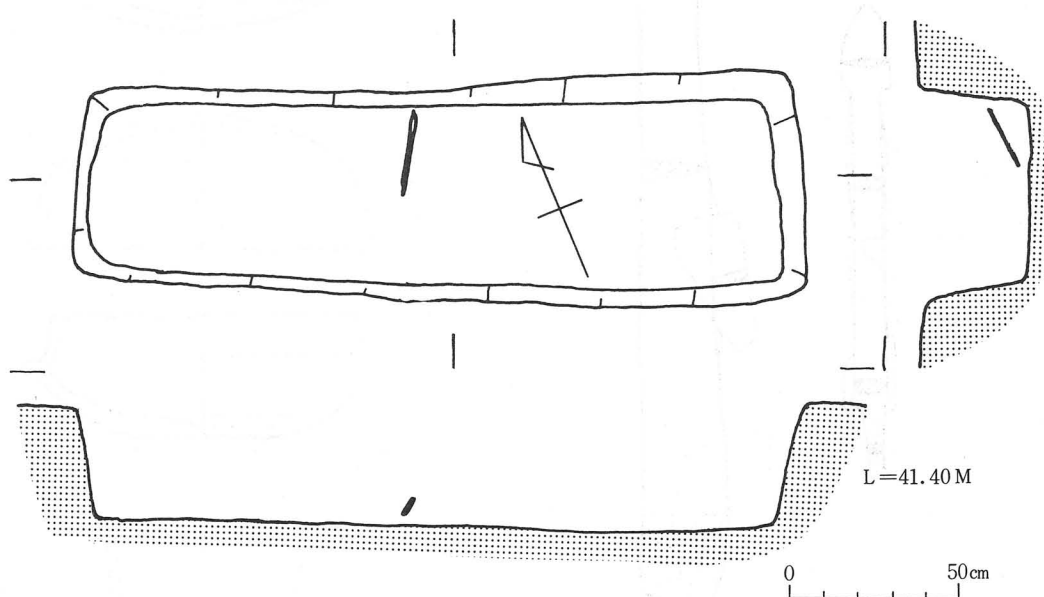
に検出され、それを掘り進めたのが第一主体部・第二主体部である。

検出規模は、第一主体部が $1.86 \times 0.76 \times 0.24$ mの若干平行四辺形を呈し、第二主体部は $2.12 \times 0.66 \times 0.45$ mの若干北西辺（短辺）幅が狭い長方形を呈していた。

第一主体部からは、副葬品は検出されなかった。第二主体部からは、鉄製刀子一本が検出された。検出状況は、主体部主軸とほぼ直交するように、北東側長辺の中央部に接し、刃を上にしてたてかけたような状態であった。

また第一主体部北隅と第二主体部南隅とのほぼ中央で、第二主体部床面同レベルに、朱とそれに東接して鉄鏃が5本分が刃先をほぼ北東方向に向け、若干基部が刃先よりレベル的に下がった状態で出土した。

以上のようなことから、主体部は木棺直葬で、検出した規模から木棺痕のみと考えられる。第一主体部と第二主体部の間から鉄鏃が出土していることは、検出過程から第三主体部があったか、または第一主体部と第二主体部が同時に大きい掘り方の中に埋葬されたと考えられる。

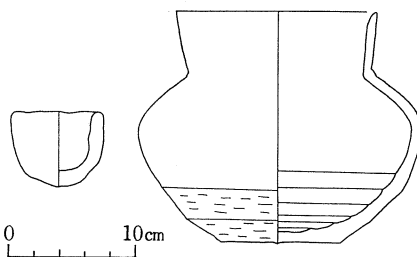
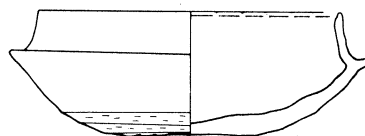
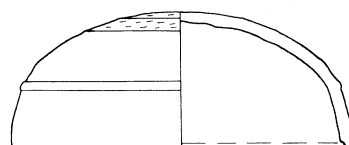
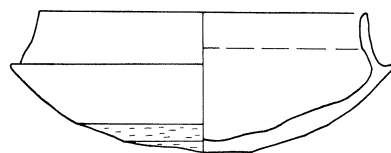
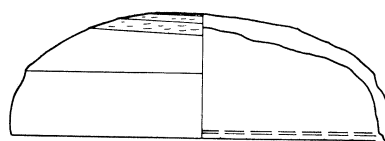
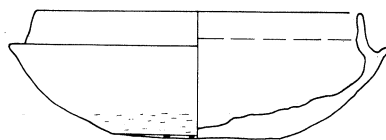
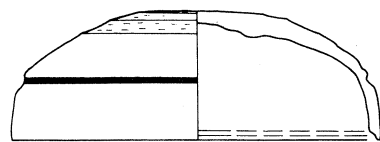
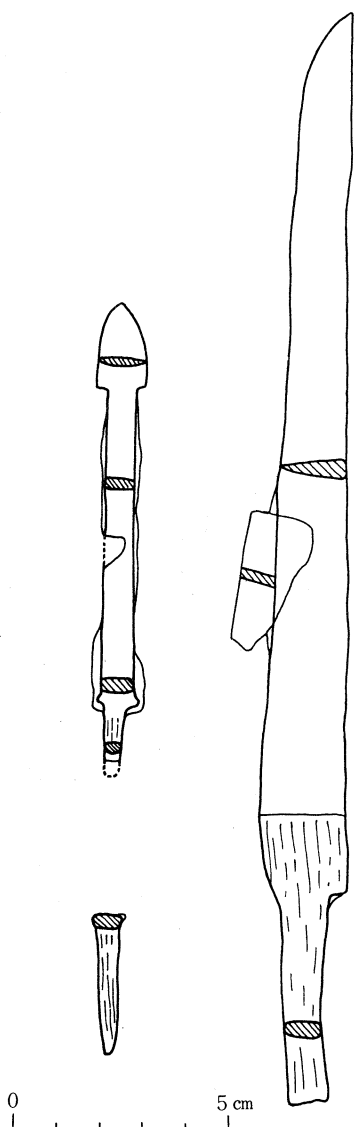


第9図 第二主体部実測図

(4) 遺物 (第10図)

本古墳からは、鉄製品 (刀子・鏃)
須恵器蓋坏・手づくね土器が出土しているが、以下この順で述べていくこととする。

鉄製刀子 第二主体部に副葬されていたもので、刃先が上になりあたかも木棺に立てかけたようにして検出された。



第10図 遺物実測図

全長25.4cm、刃部長20.4cm、同幅1.4cm、棟厚0.4cm、茎幅0.9cm、同厚0.4～0.3cmを測る。茎端から36.8cm（刃部1.8cm）まで、木質が若干残っていた。また刃部中央一部に銹が厚さ0.2cm前後の平縁状に残っており、鞘状のものが推定される。

刀子としては刃部がかなり長く、短刀と誤りかねないほどである。

鉄鏃 第一主体部北隅と第二主体部南隅とのほぼ中央、第二主体部床面と同レベルで、朱と共件したものである。完形は1本もなく、完形に近いものが1本あるほかは、茎部4・身部1が出土しており、5本ないし4本があったと考えられよう。

完形に近いものは、推定全長10.9cm、篋被部幅0.7cm、同厚0.3cm、矢先部長2.0cm、同最大幅1.2cm、同厚3.0cm、茎長（推定）1.8cm、同厚0.3cmを測る。関は明瞭ではないが、矢先部と茎はかなり短く、突根棘篋片丸柳葉式に属するものである。

他の残欠を見ると、完形に近いものとはほぼ同規模な茎1本と、長3.2～3.4cmのやや長いものが2本ある。

完形品がなく不明確ではあるが、茎の形態から2つに分けられよう。

須恵器蓋坏 第一主体部南隅すぐ外側に、いずれも天地逆にして合わさり、しかも相互にL状に置かれてた状態で検出された。

No.1-1は、口唇部に段がつき、天井部から体部に移る所に鈍い突帯をもちそれに沈線が入る。天井部は回転ヘラ削り、体部は回転なでをしており、内面は中央部を横なで、他は回転などをしている。灰白色を呈し、重量も軽い。

No.1-2は、口唇部に段はなく、受部はきれいにつまみ上げており、底部はやや雑な回転ヘラ削りをしている。他の調整はNo.1-1と同じで、色調、重量感も同じである。たちあがり部は、内傾し内面に顕著な起伏がある。

No.2-1は、口唇部に段がつき、天井部から体部に移る所に段がついている。No.1-1と主要寸法ほぼ同じであるが、段以下口縁までの間はややふくらみがある。

No.2-2は、No.1-2に比べ受部が浅く、たちあがりはかなり高い。器高も少し高いが、他の重要寸法はほぼ同じである。たちあがり内面は、平坦をなしている。調整等もほぼ同様であるが、青灰白色を呈している。

No.3-1は、完全にNo.3-2と合わさっていなかったために体部が壊れており、焼成がやや不良のせいか細部は明瞭でない。口唇部に浅い段があり、天井部から

体部に移る所に突帯がついている。調整等は他とほぼ同様であるが、焼成がやや不良で、色調も黒灰色を呈している。

No. 3-2は、No. 2-2に比べ各主要経1 cm前後小さいが、たちあがりや器高はほぼ同じである。口縁部の段は、明瞭には確認できず、色調は青灰白色を呈している。

以上を概観すると、大きさの面でNo. 1-1とNo. 2-1がほぼ同じであり、No. 3-1は器高以外が少し小さい。身でもほぼ同様であるが、たちあがり高はNo. 2-2とNo. 3-2が高く、これ等に比べるとNo. 1-2はかなり低い。

次に調整等でみると、No. 3-1は天井部から体部に移る所が突帯となっているのに対し、No. 1-1とNo. 2-1は突帯よりも沈線のほうがめだつ。そしてNo. 3-1の焼成は他に比べても、不良のものであり、全体的に少し焼成が柔かい。No. 1-2の受部はきれいにつまみ上げられているのに対し、No. 2-2とNo. 3-2は平坦であり、口縁からたちあがりにかけての形態も、No. 1-2とNo. 2-2やNo. 3-2とでは異なっている。

須恵器小形壺 第二主体部北東側長辺のほぼ中央、すぐ外側で正立した状態で検出された。

若干ふくらみかげんの口縁から基部、体部の上から1/3のところ、最大径となっている。肩から腹部にかけてかき目状の回転調整がみられ、体部高1/2以下は回転ヘラ削りで、底部は回転ヘラ起しをしている。

色調は青灰色を呈し、焼成も良好である。

手づくね土器 第一主体部西隅外側で、口が東へ向くように倒れた状態で検出された。るつぼ状で上からみると、隅丸方形を呈している。底は若干の平らな部分があり、安定性は良い方である。

(5) 五輪塔

本古墳に付随する五輪塔には、墳頂部にあったものと、墳丘南裾平坦面でその一段高い南の平坦面にあったものがある。材質も二種類に分けられ、形態的にも分けられる。しかし細部については、風化が著しく明確な判断は無理である。ただいえることは、墳頂にあったものは、墳頂中央にあった基壇に建てられたものであることと、両者ともに村内では極めて珍しい材質であることである。

Ⅳ 中山五輪塔群

中山五輪塔群は、字中山の台地状に伸びた丘陵の東根元部に仕置している。三好勇市氏旧所有地内に、竹根が畑に延びることを防ぐ溝を掘り、その壁に近くに散在していた五輪塔を石垣として、高さ1.0m、長さ7.5mにわたって使用されていたものである。

三好勇市氏の協力を得、石垣として使用されていたものの全部を掘り起し、現在三好勇市氏所有地内で保存されている。

五輪全部揃って1基となったものは数基と考えられ、本来のセット関係を無視して各輪をみた場合、22基が五輪揃い、その他各輪等からみて少なくとも45基以上あったと考えられる。

素材はかなり制約されていたようで、本来の各輪の形状とは異なり、左右・前後不对称のものが多くみられる。各輪の形状・調整等は、風化・破損等で詳細には検討できないが、梵字は見られなかった。

空輪は宝珠形の安定感のあるもので、その形態は二種類に分けられる。一種はいわゆる宝珠形のもので、やや背の低いものも一部ある。もう一種は逆台形と円錐形を組合せたもので、いわゆる宝珠形のものに比べ全体に背が高い。二種類ともに、下半分は直線的な形態をなしている。

風輪は長方形ないし逆台形のもので、空輪との関係から個体差はあるがおおむね二種類に分けられよう。空輪がいわゆる宝珠形のもの、逆台形で背が高い。空輪が宝珠形でないものは、長方形で背が低い。いずれも素材の制約から、平坦面になっているものが多く、上からみると隅丸長方形ないし隅丸台形のものが多い。また火輪への挿入部は安定しているが、空輪底部中心からずれたものが多い。

火輪はあまり背の高いものはないが、軒反りは顕著なものとはほぼ直線的なものがある。下端も軒反り同様に、反りの顕著なものとは直線的なものがある。屋根流れや軒口も各二種類ある。風輪が挿入される場所は、しっかりしたものである。

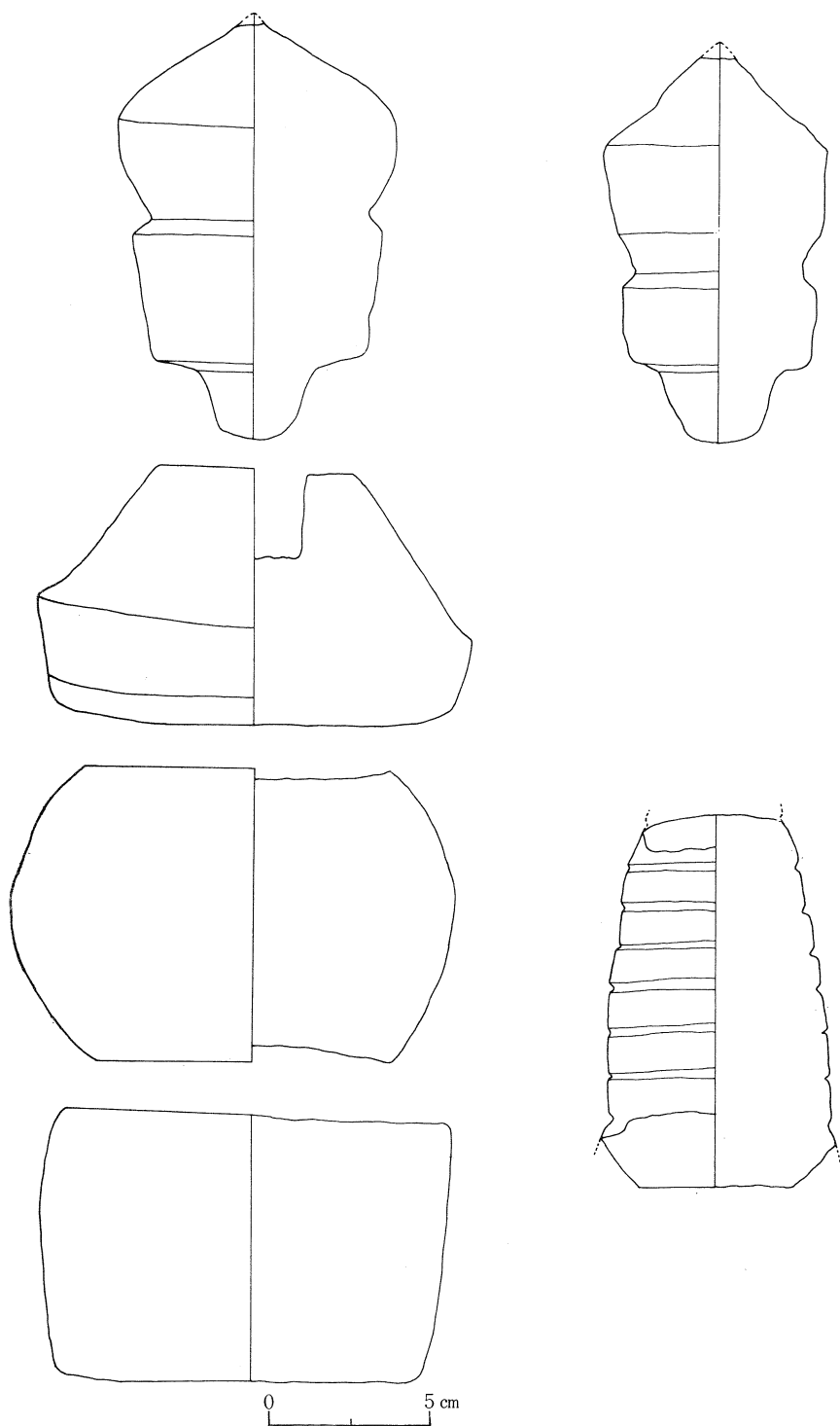
水輪は球形と下ぶくれの中間に属し、背の高いものと低いものとに分けられる。天地が広いカットになっており、やや方形に近いものもある。

地輪は正立方体のもので、背の低い立方体とに分けられる。

以上五輪塔について概観したが、前述のように45基の五輪塔全てが同一時期とするには無理があろう。造立期からの五輪全てが揃ったものではなく、その検討も充分に行っていない段階ではあるが、形態から少なくとも2種類に分類できると思われる。各輪の様相より中世後半期に属するもので、個々にはかなり幅があると考えられる。

五輪塔の外に、1点宝篋印塔の相輪部残欠があるので若干の状況を述べる。現状では7本の区画線が入った九輪部と見られ、一番下は請花部の一部と考えられる。五輪塔のように、素材に制約をうけた形跡はなく、整った宝篋印塔の一部と考えてよかろう。

中山五輪塔群について大概を述べたが、この同一台地上にはかなりの五輪塔や宝篋印塔があり、また村内にも多くのものが点在、群集しているので、全村的な検討が必要な時期にきたと考えられる。



第11図 五輪塔実測図

V 結 語

中山古墳群の3ないし4基存在する古墳のうち、2号墳を調査したのであるが、丘陵先端部の地形を巧みに利用して築造されていた。墳丘築造以前に何らかの遺構があったが、いわゆる旧表土を残した状態で丘陵側を大きく削取し、それを盛土として利用している。旧表土（盛土以前の表土）の状態は、炭火物を敷きつめたかのようにあり、儀礼的なものとすれば注目に値する。

内部主体は二つの木棺直葬痕が検出されたが、さらに第一主体部と第二主体部との間から、朱と鉄鏃が検出されている。以上の結果と検出状況から、次のようなことが考えられよう。

第一に、第三主体部の存在が考えられる。そしてこの時、第一と第二主体部の間に平行してあったか、またはどちらか一方と切合い関係にあったかの二説が考えられる。いずれも、第二主体部床面レベルと同じ深さのものである。

第二に、第一と第二主体部は同時に埋められ、その時この二つの主体部間も掘り込まれていたか、または盛土がしてなかったと考えられる。

これらのことが考えられるが、第三主体部の確認、第一と第二主体部の前後関係も把握できなかつた。

遺物は土器（須恵器・手づくね土器）と鉄製品（刀子・尖根鏃）であるが、土器は主体部直上にあつたことから、本古墳の時期決定の材料となり得る。

土器はいずれもその出土状況から、ほぼ原位置と考えて誤りないであろう。須恵器蓋坏3セットについては、既に述べたように個体別差があるが、同一時期のものと考えてよかろう。類例としては、荒神谷7号墳（方墳）出土品・喰ヶ谷1号墳出土品・増福寺1号墳出土品・鍛冶屋谷1号墳出土品・井出平山2号墳出土品等が挙げられるが、中でも前3例はよく似た形態をもっている。口縁径やたちあがりの形態等から、山本清氏の須恵器編年を論拠として、Ⅱ期の範囲にいれてよいと考えられる。

他の土器については、管見では類例がなく確証は得られないが、出土状況や作り等から考えて、須恵器蓋坏と同一時期と考えてよかろう。

墳丘下の遺構については、封土トレンチの結果確認され、封土を完全に除去し

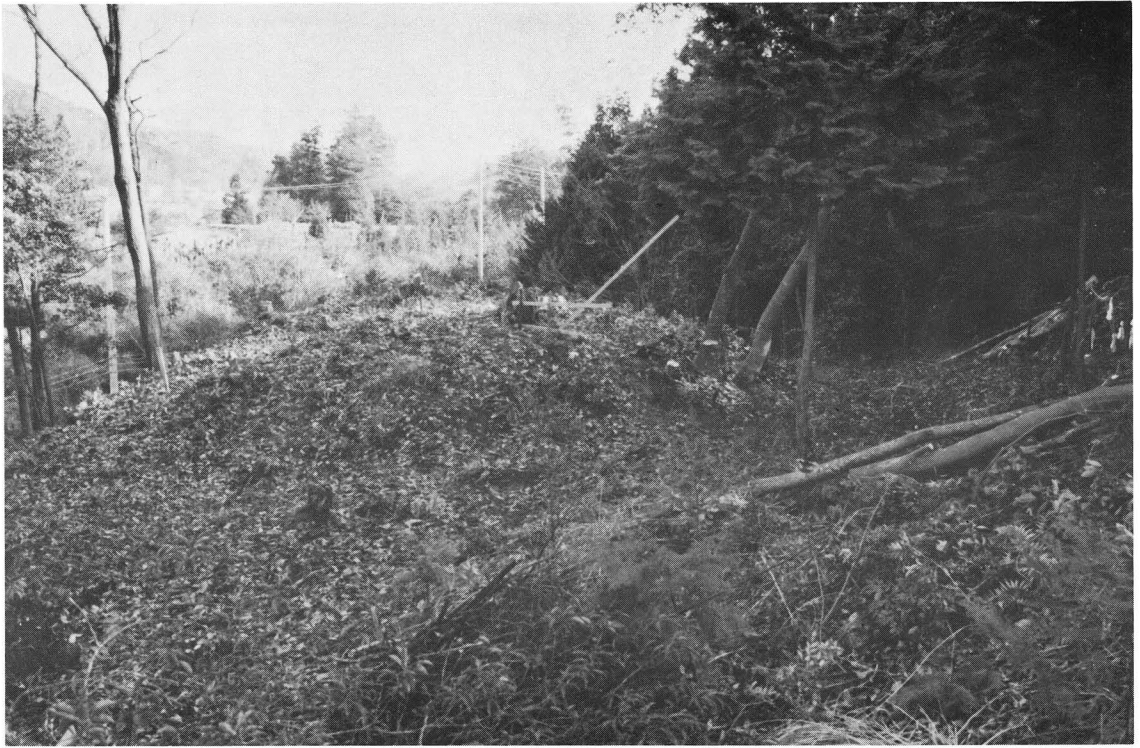
て検出されたが、ある程度の時期が経た後（南側段差部に土砂が堆積した後）に、古墳が築造されたと推定できるのみである。南側段差部の黒色土層（炭化物層）直下で、1点の細片化した土師器と思われるものを検出したが、この遺構の性格等を判断し得るものではなかった。

また墳丘南側平坦面南西隅から須恵器片が検出されているが、壺片という程度しか判断できなかった。

以上のようなことから、本古墳は丘陵先端部に、古墳時代後期（山本氏須恵器編年のⅡ期）に築造されたもので、その後中世半ば前後に五輪塔が構築され、近代は荒神を祀っていたものと考えられる。

- 註1 『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』所版 島根県教育委員会 1975年
- 2 『喰ヶ谷古墳群』 松江市教育委員会 1981年
- 3 『増福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1981年
- 4 『島根県埋蔵文化財調査報告書』 第Ⅳ集所版 島根県教育委員会 1973年
- 5 註4に同じ
- 6 『増福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1982年

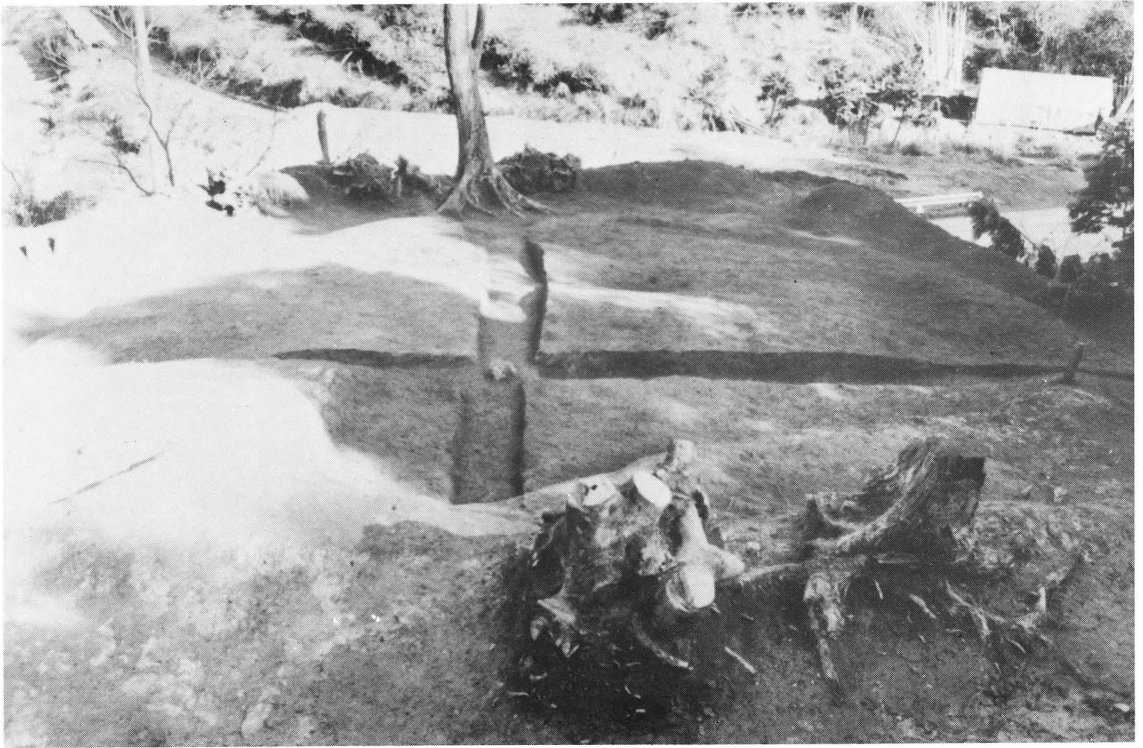
VI 図 版



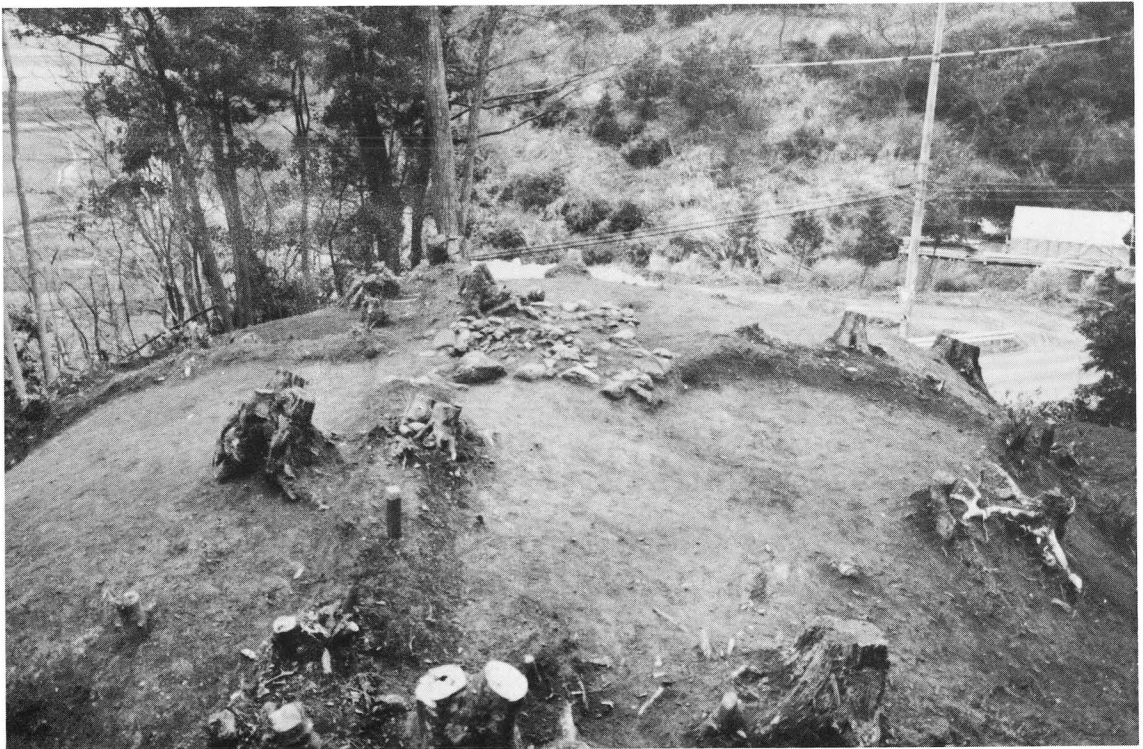
発掘前（南西より）



発掘後（南西より）



墳丘下遺構（南より）



五輪塔基壇遠景（南より）



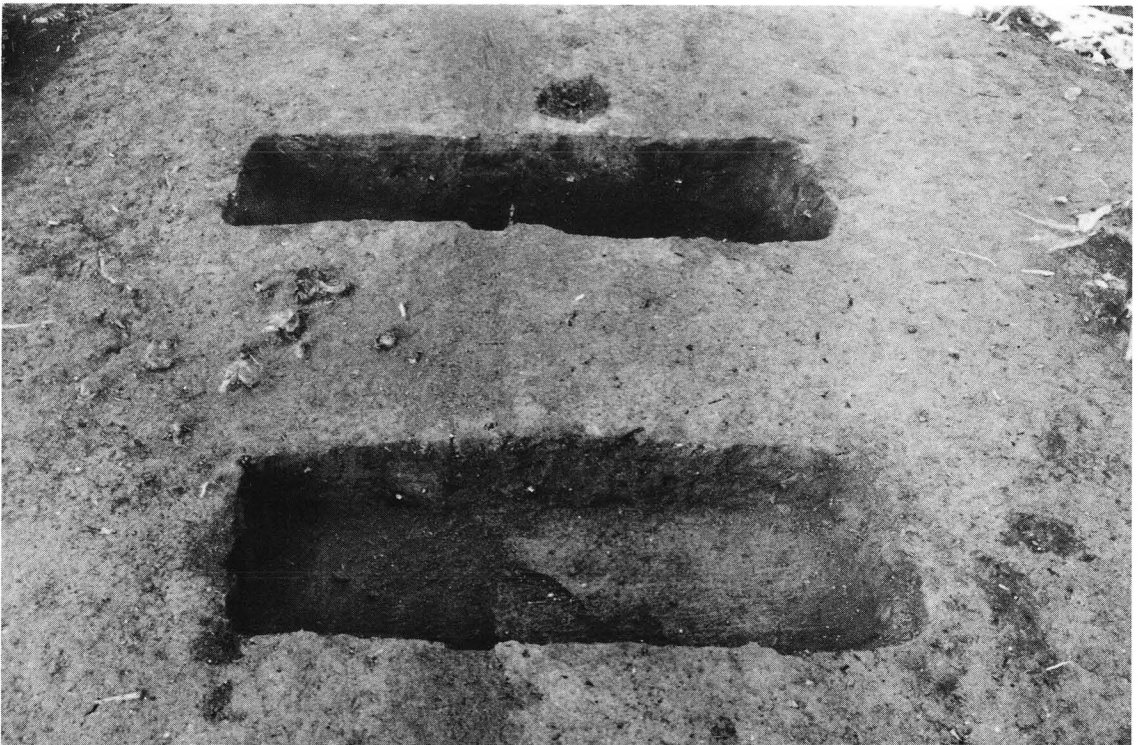
五輪塔基壇（南より）



遺物出土状況No.2・3（南より）



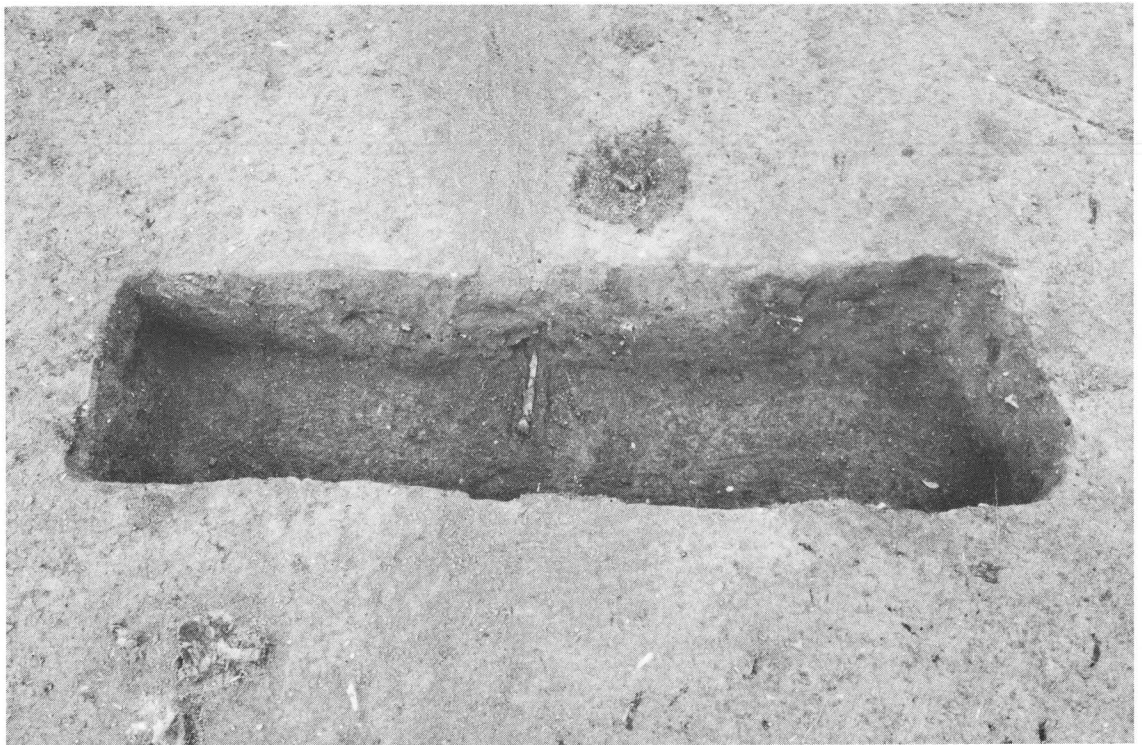
主体部遠景（南より）



主体部近景（第一主体部 下 第二主体部 上）（南より）



第一主体部（南より）



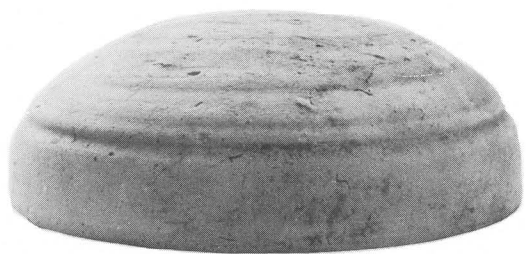
第二主体部（南より）



墳丘南平坦面五輪塔分布状況（北より）



墳丘南側トレンチ（北より）



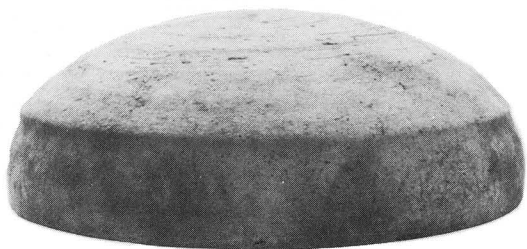
No. 1 - 1



No. 1 - 2



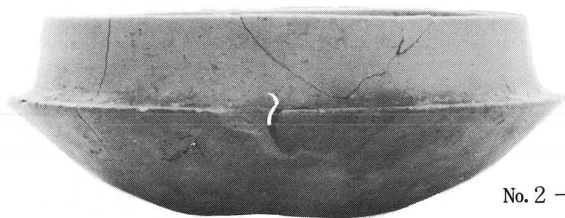
No. 4



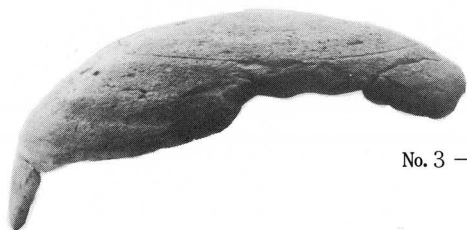
No. 2 - 1



No. 5



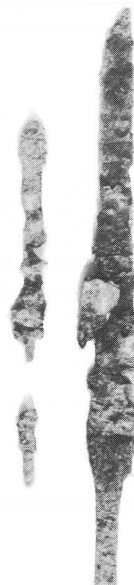
No. 2 - 2



No. 3 - 1



No. 3 - 2



鐵
鏃

刀
子



中山五輪塔群（南東より）



中山五輪塔群（北東より）



砥石

昭和57年3月20日印刷
昭和57年3月25日発行

中山2号墳
中山五輪塔群

編集者 宮本徳昭
発行 八雲村教育委員会
印刷 黒潮社